

小林 毅, 東 祐二, 渡辺愛記 (編)

生活の行為を紡ぐ作業療法プラクティス 脳血管障害の評価とアプローチ 回復期における着眼点と行動プロセス

坂 田 祥 子

(東京湾岸リハビリテーション病院, 作業療法士)



本書は、回復期における医療機関から地域生活を見据え、「脳血管障害患者の作業療法をどのように考えて、どのようにしたらいいの?」と不安に感じている OT の道標となる 1 冊である。なぜならば、経験の浅い OT から日ごろの臨床業務における悩みごとや希望するテーマを聞き取り、それを基に内容を選定し、ベテラン OT たちが執筆しているからである。日常感じるさまざまな疑問の答えが満載の指南書だ。

それだけでなく、作業療法の核となる個別のニーズに合わせたアプローチの実践を重要課題とし、適切なアプローチとともにそれを導くアセスメントのあり方に軸においた解説がされている。本書は単なる how-to に終わらず、ベテラン OT が実践の場で「何を観察し、どのような情報を入手し、何を考え、何をしているのか」というクリニカルリーズニング（臨床推論）に図表で説明が補強され、読み手の理解を深め、次の実践での応用につながるものであるに違いないと感じた。

内容は、「PART I 生活を見

据えた作業療法の取り組み」、「PART II 評価技術」、「PART III 治療技術」の 3 部構成となっている。

「PART I 生活を見据えた作業療法の取り組み」では、急性期・回復期・移行期・在宅生活期のそれぞれの時期における脳血管障害患者の病態の特徴を踏まえ、医療保険・介護保険制度の中で作業療法に何が求められているのかを解説している。

「PART II 評価技術」では、情報収集や観察のポイント、患者一人ひとりの生活を見る ADL 評価や意味のある作業を見いだすための評価、再発や転倒のリスク管理、目標設定のあり方について解説している。

「PART III 治療技術」では、上肢機能・体幹下肢機能と作業療法、高次脳機能障害と生活、こころのケア、「できる ADL, IADL」をいかに「している ADL, IADL」にするか、365 日リハビリテーション実施体制と作業療法、多職種間連携と目標設定、退院先への情報提供と、回復期では欠かせない内容となっている。

さらに、各章ごとに「ミニレクチャー」という形で、一つのテーマに沿った解説があり、理解しやすい。また、随所に「MEMO」、「POINT」、「アドバイス」という囲みで、知識を広げ、間違いやすいところやしっかり理解しておきたいポイントについて違う角度から説明し、臨床実践のコツ等が解説されている。

「新人作業療法士のみなさんへ」という囲みでは臨床に臨む心構えを伝え、「読んでステップアップ!」で自己学習のための参考書を挙げてくれている。「箸休め」では、OT がふとしたときに遭遇する思いについて触れられ、ほっとする。

若い OT たちへの先輩 OT からのエールが感じられる 1 冊であるとともに、経験者も日常の臨床を見つめ直す機会となる 1 冊である。

B5 判 240 頁 5,500 円 + 税
文光堂 刊
☎ 03-3813-5478